

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03153

研究課題名(和文) 初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避のための臨床心理学的研究

研究課題名(英文) Clinical psychology research aiming at elucidation and avoidance of superficial listening in inexperienced therapists

研究代表者

花田 里欧子 (Hanada, Ryoko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：10418585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避であり、成果は以下の通りである。1. 従来活字化・言語化が困難とされてきた、臨床心理面接における傾聴に基づく介入のタイミングやコンテキストに関する知識の実際的な運用の拡大と深化をはかることができた。2. セラピストの介入に関わる発話・身振り・口振りと傾聴の評価値との関連を、傾聴における多種多様な信号として処理する技術により、複合的な構造として記述し伝達をはかることができた。3. 対話研究の複数領域の研究者と協働して傾聴の知識発見をすすめ、臨床心理学内外の対話実践者にとって効果的な介入に関する多面的で専門的な知識の共有をはかることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「心理臨床家の専門資質の維持向上を具体的にどう支援していくか」という臨床心理学の今日的課題に対して、次のように寄与した。1. 介入のタイミングやコンテキストといった知識の実際を詳らかにすることで、臨床心理面接がどのような傾聴によって行われているのかについて可視化、意識化ができた。2. 介入に関わる発話・身振り・口振りと傾聴の評価値との関連を明らかにし、傾聴という複雑な相互作用である面接過程のエビデンスの確立ができた。3. 各種コンサルティングやインタビューの場において臨床心理学的な介入が参照されることにより、建設的な傾聴を構築することができ、サービスの質の向上と供給ができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to elucidate and avoid superficial listening in inexperienced counselors. 1. We were able to expand and deepen the practical application of knowledge about the timing and context of interventions based on listening in clinical psychological interviews, which has traditionally been difficult to put into print and language. 2. We were able to describe and communicate the relationship between the therapist's intervention-related speech, gestures, and verbalizations, and the evaluation values of listening, as a complex structure, by using techniques to process a wide variety of signals in listening. 3. We were able to collaborate with researchers in multiple fields of dialogue research to discover knowledge about listening, and to share multifaceted and specialized knowledge about effective interventions for dialogue practitioners both within and outside of clinical psychology.

研究分野：臨床心理学

キーワード：傾聴 初学者 うわすべり 臨床心理学 臨床心理面接コーパス 感情推移観測システム(EMO system)
認知科学 聴覚・音声学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

初学者が陥りがちな傾聴のうわすべりとは、心理療法を行わなければならない等の焦りや余裕のなさから介入に気を取られ話を聞き流し、聴くことが疎かになる事態である。そのせいでたとえば、認知行動療法を試みてマニュアルにこだわり技法を使う、精神分析的心理療法を試みてむやみに解釈を行う、家族療法を試みてだしぬけに課題を投げかける等が起きる。介入以前に聴こうとしないセラピストにクライアントは不信を募らせる。結果、支援は失敗してしまう。

そもそも臨床心理面接とは、セラピストとクライアントとの人間関係が構築される過程で“共感”“納得”“理解”“再生”等の心情が生まれる貴重な心的空間であり、様々な介入を用いて、クライアントの心の支援に資することこそセラピストの最も中心的な専門行為である。ところが、テキストや講義等のみでは介入のなんたるかは学べても、それらすべての下支えとなる傾聴をもとにいかに関用するかまで修得するのは容易ではない。そのため、介入の何を行うかだけでなくいかに聴き、さらにはいつどこでそれを行うのかに関する知識が重要となる。特に、多様なアプローチに関心を持つ心理臨床家をを目指す人たちが学ぶ大学院等の教育現場では、セラピストが共通に参照可能なものとして、こうしたタイミングやコンテキストに関する知識を示していく必要があるが、未検証のままである。これを達成するには、個別ケースの検討に加えて、臨床心理面接という対話の流れに差し込まれる介入の時間情報と位置情報が、クライアントの心持ちにどのようなインパクトを与えるのか、連続的かつ客観的に計測することで実証かつ実践されなければならない。

2. 研究の目的

本研究は、初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避について、臨床心理面接におけるセラピストの介入のタイミングやコンテキストがクライアントにもたらす心情を連続的に計測するという観点から明らかにする。具体的には、介入にまつわる発話内容(言語情報)、そこでの身振り(身体動作。例：姿勢やうなずき等の空間情報)や意図や心的態度等を伝達する役割を持つ口振り(音声の中のパラ言語。例：声のピッチやスピードの変化等の韻律情報)、感情推移(どのくらい傾聴していると感じるかの評価値)の関連を検討する。取り組む課題は次の二つである。

傾聴のうわすべり発生のメカニズム：臨床心理面接対話の整備及び対話のマルチモーダルな分析による知識発見の手法を用いて、不適切な介入のタイミングやコンテキストの特徴を、発話・身振り・口振りと傾聴の評価値に関する定量的な観測データから実証する。

傾聴のうわすべり回避の方法：初学者への知識の還元と効果の検証の手法を用いて、しっかり傾聴しつつ的確に介入するためのタイミングやコンテキストに関わる知識を実践する。

3. 研究の方法

傾聴のうわすべり発生のメカニズム：

- 臨床心理面接対話の整備：44 対話からなる【臨床心理面接コーパス】よりセラピストの不適切な介入を抽出する。本コーパスは、臨床心理学を学ぶ大学院生の体験的な面接実習を目的に開発した。クライアント役は模擬事例ではなく提示可能な実際の問題を訴えセラピスト役が対応する様子を収録し、発話・身振り・口振りをとらえる加速度データを同時計測してある。ここには初学者特有の傾聴のうわすべりから介入が的確になされていない場面が多く含まれることが現在まで分かっているが、未検証のためこれを分析対象にする。加えて新たに臨床心理士による介入の使用場面を収録する。このときセラピスト役は自身が使用可能な介入を予め作成するリストからいずれかを選択するが、実際使用するかどうかはセラピスト役の判断に委ねる。収録後、セラピスト役に介入の使用の有無の理由を問い、運用に関するセラピストの主観的評価の資料とする。
- 対話のマルチモーダルな分析による知識発見：抽出したセラピストの不適切な介入の発話・身振り・口振りと傾聴の評価値の関連性分析を行い、支援への影響や成否の点から解釈し、知識化する。

(1)感情状態の評価：応募者らが制作し改良を重ねてきた【感情推移観測システム(EMO system)】で対話を視聴しながらそこで生起する傾聴評価値を連続的に入力する。

(2)感情状態変化の共通性の分析：介入場面の傾聴評価値の変化点(EMO value)に注目し、時間情報と位置情報からそこでの発話・身振り・口振りを調べる。特に線形回帰モデル等の統計手法により、物理量である音声や頭部加速度の基本周波数やパワーから傾聴評価値が説明できるかを分析する。

傾聴のうわすべり回避の方法：

- 初学者への知識の還元と効果の検証：得られた知識を授業やワークショップ等で初学者に公開する。その学習効果をインタビューや評価シート等で確認する。加えて授業やワークショップ等の前後での臨床心理面接の差異が、対話のどのような特徴量に反映されるかを評価する。

4. 研究成果

- (1) 従来活字化・言語化が困難とされてきた、臨床心理面接における傾聴に基づく介入のタイ

ミングやコンテクストに関する知識の実際的な運用の拡大と深化をはかることができた。花田(2020a)では、花田, 中島, 井上, 古山, & 入野(2018)、花田, 入野, 古山, 井上, & 門田(2019)や仁田, 入野, 古山, 花田, 井上, 門田, & 熊野(2020)をふまえ、その適用場面や活用方法の現在の技術の到達点について紹介し、シンポジウム形式で指定討論を行った。情報処理技術を臨床心理学的なアセスメントに応用することで、従来の方法では検出できなかったリスクの発見や、早い段階からの支援提供が可能となり、アセスメントへの応用のみならず、介入への応用についても検討が行われ始めている。一方で、現在の技術において、臨床心理学的な実践の全てを人工知能に置き換えることは現実的ではなく、人工知能の強みを生かした適用場面や活用方法の可能性について検討した。その結果、非身体/言語と身体/非言語の取扱い、ビッグデータとスモールデータの活用、アセスメントと介入のありかた、リテラシー・バイアスの問題、アノテーションにおける人手・目視と機械化・自動化・効率化の課題、訓練・教育への応用について議論を深めた。花田(2020b)では、コミュニケーション研究の実際とその心理臨床への応用についてワークショップを行った。コミュニケーション研究の実行にともなう方法論等の諸特性をふまえ、ヴィクトリア大学グループによるコミュニケーション研究、2者間や3者間以上のコミュニケーションに関する先行研究をレビューした。その上で、花田, 中島, 井上, 古山, & 入野(2018)、花田, 入野, 古山, 井上, & 門田(2019)や仁田, 入野, 古山, 花田, 井上, 門田, & 熊野(2020)のほか、臨床心理面接中の相互作用を実証的に検討するものとして、面接の音声-加速度同時記録システムによる計測評価、面接におけるノート使用のインタラクションへの影響評価、スキーマ療法における感情表出の定量化について紹介し、参加者との質疑応答を通じ、今後の方向性や課題について検討した。

- (2) セラピストの介入に関わる発話・身振り・口振りと傾聴の評価値との関連を、傾聴における多種多様な信号として処理する技術により、複合的な構造として記述し伝達をはかることができた。花田, 中島, 井上, 古山, & 入野(2018)では、実験を実施し、EMO systemによる評価の実際と課題について明らかにした。まず、第三者の臨床心理士が面接ビデオを視聴し、感情評価値入力手法により傾聴度を時系列入力したのち、傾聴度時系列データの変化点(上昇/下降)を多重解像度分析によって自動検出した。さらに、同じ臨床心理士によって、なぜ変化点をそのように評価したのかの記述を行い、その変化点が上昇か下降かの判断を初学者の集団で実験し、両者の評価の比較と統計的分析を行なった。これにより、傾聴の構成要素単位による評価測定ではなく、面接全体として傾聴が成立したかどうかを測定する評価手法を提案した。花田, 入野, 古山, 井上, & 門田(2019)では、傾聴を進行中の臨床心理面接において生じる感情にかかわる連続的な事象としてとらえ、その評価について検討した。このためのアプローチとして次の手順で実験を実施し、評価の実際と課題について明らかにした。研究1において、臨床心理面接コーパスを対象としたEMO systemによる評価を試みることで、傾聴の連続的評価の実際を示した。次に、研究2では、研究1によって得られた傾聴の連続的な評価と、従来の要素的なタグ評価とを比較することで、EMO systemによる傾聴評価の特徴を示した。最後に、研究3において、EMO systemの評価者として、臨床心理士と初学者とを比較することで、評価者属性が傾聴評価に与える影響を示した。仁田, 入野, 古山, 花田, 井上, 門田, & 熊野(2020)では、スキーマ療法にEMO systemを適用し、感情表出を測定する方法を開発した。スキーマ療法とは、認知行動療法、精神分析、アタッチメント理論、体験療法の要素を統合した心理療法であり、患者のもつ幼少期の逆境体験によってつくられた自滅的な認知・感情・対人関係のパターンである「早期不適応的スキーマ」を治療のターゲットとする。幼少期に満たされなかった欲求が、満たされるという感情的な体験である修正感情体験は重要な機序の一つであるが、患者の感情表出の程度と治療効果の関連や、患者の感情表出を促進する治療者の関わりについては不明であった。そこで、EMO systemを用いて治療効果や治療者の関わりとの関連を検討した。その結果、EMO systemによって特定されたポイントにおいて、臨床的に有意な感情表出が示唆された。Inoue, Irino, Furuyama, & Hanada(2021)では、臨床心理面接におけるセラピストとクライアントの2人の対話における頭部の動きを、ビデオ撮影と頭部装着型加速度センサーを用いて分析した。加速度計はメンタルヘルス領域で活用されているが、メンタルヘルス関連のコミュニケーションの分析には利用されていない。そこで、臨床心理面接における対話の状態と、時間的に変化する頭のうなずきや動きのパターンとの関係を調べた。頭のうなずきには手作業で注釈が付けられ、頭の動きは加速度計を用いて計測された。ビデオデータから取得したアノテーションに基づき、頭部のうなずき回数を分析した。加速度計のデータを用いて、2人の参加者の頭の動きの相互相関分析を行った。2つの事例研究の結果から、上向きと下向きのうなずき回数のパターンは、カウンセリング対話におけるステージの移行を反映している可能性があること、また、頭部の動きの同期のピークは、対話における強調と関連している可能性があることが示唆された。
- (3) 対話研究の複数領域の研究者と協働して傾聴の知識発見をすすめ、臨床心理学内外の対話実践者にとって効果的な介入に関する多面的で専門的な知識の共有をはかることができた。佐藤, 鴨志田, 二本松, 坂本, 櫻庭, 長谷川, 生田, 花田, 横山, & 狐塚(2022)では、心理療法の種別による相互作用の比較を行なった。臨床心理面接場面のコミュニケーションに関するマイクロ分析は、今なお目新しい手法ではあるものの、セラピストとクライ

アントの相互作用を客観的、かつ定量的に検討するためのアプローチとして急速に発展している。家族療法(FT)と認知行動療法(CBT)のセラピーにおけるポジティブ・ネガティブ発話回数、及びクライアントの発話に対するポジティブ・ネガティブ発話回数、セラピストごとのポジティブ・ネガティブ発話回数を検討した結果、FTとCBTのポジティブ、ネガティブ発話回数に有意な偏りはみられなかったが、FTの中でもMRIコミュニケーション学派家族療法のVTR画像映像において、ポジティブ発話がネガティブ発話に比べ有意に多いことが示され、発話タイプと傾聴との関連について知見を得た。花田(2023)では、臨床心理面接プロセスに関する多様な研究の可能性について検討した。近年、複数の方法を組み合わせた計測や機械学習モデルにより、マルチモーダルな側面から臨床心理面接プロセスの研究が行われるようになった。本シンポジウムでは、臨床心理面接プロセスの定量的な測定を行った研究、臨床心理面接において「腑に落ちる感覚」を質的に評価する研究、近年工学領域で盛んなf-NIRSを用いたセラピスト・クライアント間の同時脳活動測定の研究に関するレビューとその応用可能性に関する話題提供をめぐり、シンポジウム形式で指定討論を行った。その結果、セラピスト教育への展開、心理療法の定義、実験室と現場の接続、について質疑を行ったのち、全体討議として、臨床心理面接において「良い展開である」とはどうか、それにとともなう傾聴のありかたをめぐって、議論を深めた。

<引用文献>

- 花田里欧子, 中島隆太郎, 井上雅史, 古山宣洋, & 入野俊夫. (2018). 臨床心理面接における傾聴度変化の評価 臨床心理士と初学者の比較 . 人工知能学会全国大会(第32回), 3C1-0S-14a. https://doi.org/https://doi.org/10.11517/pjsai.JSAI2018.0_3C10S14a02
- 花田里欧子, 入野俊夫, 古山宣洋, 井上雅史, & 門田圭祐. (2019). 臨床心理面接における「傾聴」の再考に向けた時系列連続評価アプローチの提案. 東京女子大学心理臨床センター紀要, 9, 41-62.
- 花田里欧子. (2020a). 情報処理と臨床心理学 現在の到達点とこれから . In 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議大会企画シンポジウム(話題提供者:坂本真樹, 横谷謙次, 高木源).
- 花田里欧子. (2020b). 最新のコミュニケーション研究とブリーフセラピー. 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議ワークショップ.
- 仁田雄介, 入野俊夫, 古山宣洋, 花田里欧子, 井上雅史, 門田圭祐, & 熊野宏昭. (2020). 感情推移観測システムによるスキーマ療法における感情表出の定量化に関する予備的研究. In 早稲田大学応用脳科学研究所 応用脳科学カンファレンス.
- Inoue, M., Irino, T., Furuyama, N., & Hanada, R. (2021). Observational and Accelerometer Analysis of Head Movement Patterns in Psychotherapeutic Dialogue. *Sensors*, 21(9), 3162. <https://doi.org/10.3390/s21093162>
- 佐藤宏平, 鴨志田冴子, 二本松直人, 坂本一真, 櫻庭真弓, 長谷川啓三, 生田倫子, 花田里欧子, 横谷謙次, 狐塚貴博. (2022). FTとCBTの心理療法家における肯定的・否定的内容の微視的分析. *Interactional Mind* 14 (2021), 14, 126-135.
- 花田里欧子. (2023). 心理療法プロセスに関する多様な研究の可能性. In 日本心理学会第87回大会公募シンポジウム(企画代表者:中村菜々子, 話題提供者:小森政嗣, 重松潤, 岩山孝幸, 指定討論者:実吉綾子)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Ryoko Hanada	4. 巻 54
2. 論文標題 Special Issue: The Ontology of Memory and the Horizon of History, Part III Emerging "Stories" Surrounding Sexual Abuse Lawsuits: Response to Dr. Haaken's Keynote Lecture	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ZINBUN	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 14
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(5)－Identified Patientの概念整理とその検証に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 13
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(4)－分節化/punctuationによる循環と変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Inoue, M., Irino, T., Furuyama, N., & Hanada, R.	4. 巻 21(9)
2. 論文標題 Observational and Accelerometer Analysis of Head Movement Patterns in Psychotherapeutic Dialogue	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sensors	6. 最初と最後の頁 3162-3162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/s21093162	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤宏平, 鴨志田冴子, 二本松直人, 坂本一真, 櫻庭真弓, 長谷川啓三, 生田倫子, 花田里欧子, 横谷謙次, & 狐塚貴博	4. 巻 14
2. 論文標題 FTとCBTの心理療法家における肯定的・否定的内容の微視的分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Interactional Mind 14 (2021)	6. 最初と最後の頁 126-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 1-2月号
2. 論文標題 システム論による家族トラブルの分析(アセスメント)と解決の具体策	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 隔月刊 地域連携 入退院と在宅支援	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 12
2. 論文標題 鳥尾マヤへの家族臨床的接近(3)ー「マヤのファックス交信録」からたどる鳥尾マヤFAX資料デジタルアーカイブの試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wakashima, K., Sakamoto, K., Takagi, G., Kamoshida, S., Hiraizumi, T., Itakura, N., Ikuta, M., Sato, K., & Hanada, R.	4. 巻 11
2. 論文標題 Examination of the effect of a marital symmetrical communication pattern and the amount of communication on problem-solving	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Brief Therapy and Family Science	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.35783/ijbf.11.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takagi, G., Wakashima, K., Sato, K., Ikuta, M., Hanada, R., & Hiraizumi, T.	4. 巻 11
2. 論文標題 The relationship between fear of COVID-19 and coping behaviors in Japanese university students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Brief Therapy and Family Science	6. 最初と最後の頁 42-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.35783/ijbf.11.1_42	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 10
2. 論文標題 鳥尾マヤへの家族臨床的接近(2)ー鳥尾マヤ資料目録作成の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 12
2. 論文標題 更新するブリーフセラピー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind X (2019)	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子, 入野俊夫, 古山宣洋, 井上雅史, & 門田圭祐	4. 巻 9
2. 論文標題 臨床心理面接における「傾聴」の再考に向けた時系列連続評価アプローチの提案	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 11
2. 論文標題 マスターセラピストと公認心理師	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind XI (2018)	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 11
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(1)ー伸三、登久子、真帆と一緒に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind XI (2018)	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 17
2. 論文標題 島尾マヤの声なき語りに関する予備的検討ー病歴と症状についてー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 I.R.S. : ジャック・ラカン研究	6. 最初と最後の頁 101-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子, & 中谷和人	4. 巻 8
2. 論文標題 偶然と例外の心理臨床ー些細ではない些細なことのためにー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上雅史, 中島隆太郎, 花田里欧子, 古山宣洋, & 入野俊夫	4. 巻 117(509)
2. 論文標題 コンプリメントのアノテーション	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子, 中島隆太郎, 井上雅史, 古山宣洋, & 入野俊夫	4. 巻 JSAI2018
2. 論文標題 臨床心理面接における傾聴度変化の評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人工知能学会全国大会論文集	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11517/pjsai.JSAI2018.0_3C10S14a02	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 5件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 リフレクティング・プロセス
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第15回学術会議(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 心理療法プロセスに関する多様な研究の可能性
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会公募シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 若島孔文, 坂本一真, 高木源, 鴨志田冴子, 平泉拓, 板倉憲政, 生田倫子, 佐藤宏平, & 花田里欧子
2. 発表標題 統合情報理論を家族研究へ応用する試みー夫婦の役割・個性・発想の差異に着目してー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 リフレクティング・プロセス
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第14回学術会議 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hanada, R.
2. 発表標題 Ontology of Memory and Horizon of History III
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所・共同研究班「家族と愛の研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hanada Ryoko
2. 発表標題 A Proposal on Reassessing “Listening” in Clinical Psychology Psychotherapy Sessions through a Chronologically Continuous Evaluation Approach and a Multilingual Listening Corpus
3. 学会等名 Linguistics Circle Event. Msida, Malta. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 最新のコミュニケーション研究とブリーフセラピー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 情報処理と臨床心理学ー現在の到達点とこれからー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仁田雄介, 入野俊夫, 古山宣洋, 花田里欧子, 井上雅史, 門田圭祐, & 熊野宏昭
2. 発表標題 感情推移観測システムによるスキーマ療法における感情表出の定量化に関する予備的研究
3. 学会等名 早稲田大学応用脳科学研究所 応用脳科学カンファレンス
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若島孔文, 坂本一真, 平泉拓, 板倉憲政, 生田倫子, 佐藤宏平, & 花田里欧子
2. 発表標題 統合情報理論を夫婦および家族へ応用する試みーコミュニケーション・パターンに着目してー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第11回学術会議
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 長谷川 啓三、花田 里欧子、佐藤 宏平	4. 発行年 2024年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談：小学校編 第3版	

1. 著者名 日本ブリーフセラピー協会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 Interactional Mind 12(2019)特集:ブリーフセラピーテキスト&ワーク【改訂版】	

1. 著者名 長谷川 啓三、花田 里欧子、佐藤 宏平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 小学校編 [改訂版]	

1. 著者名 長谷川 啓三、佐藤 宏平、花田 里欧子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編 [第3版]	

1. 著者名 ジョン・W・ソバーン、トーマス・L・セクストン、若島 孔文、野口 修司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 家族心理学	

1. 著者名 日本家族心理学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 520
3. 書名 家族心理学ハンドブック	

1. 著者名 田中 雅一、松嶋 健	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 652
3. 書名 トラウマを生きる	

1. 著者名 若島 孔文、野口 修司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 テキスト家族心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	入野 俊夫 (Irino Toshio) (20346331)	和歌山大学・システム工学部・教授 (14701)	
研究分担者	古山 宣洋 (Furuyama Nobuhiro) (20333544)	早稲田大学・人間科学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	井上 雅史 (Masashi Inoue) (50390597)	東北工業大学・工学部・准教授 (31303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	米国	University of California, Berkeley	University of California, San Francisco	Palo Alto University
マルタ	University of Malta			